

ダイヤモンド

nagi keishi

南木佳士



ダイヤモンド
ダスト

南木佳士

著者紹介

一九五一年、群馬県に生まれる。秋田大学医学部卒業。現在、長野県南佐久郡臼田町に住み、佐久総合病院に勤務する。一九八一年難民医療日本チームに加わり、タイ・カンボジア国境に赴く。同地で『破水』の第五十三回文学界新人賞の受賞を知る。以後、「文学界」を主な発表誌として、人間愛をテーマに感傷を排した文章で、生命の尊さを説く作品の発表をつづけ、『重い陽光』『活火山』『木の家』『エチオピアからの手紙』は第八十七、八十八、九十二、九十四回の芥川賞候補となった。一九八六年、それら作品を収め『エチオピアからの手紙』を上梓、このたび『ダイヤモンドダスト』で第百回芥川賞を受賞する。

ダイヤモンドダスト

一九八九年二月二十五日 第一刷
一九八九年八月三十日 第十刷

著者	南木佳士
発行者	豊田健次
発行所	株式会社 文藝春秋 東京都千代田区紀尾井町三―三 電話代表(〇三)二六五―一二二
製本	大日本印刷 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替え致します

目次

冬への順応 5

長い影 65

ワカサギを釣る 117

ダイヤモンドダスト 137

あとがき 202

装丁
菊地信義

ダイヤモンドダスト

冬への順応

夜になると発熱する日が続いた。

I

タイ・カンボジア国境で三ヶ月間の難民医療活動に参加して信州の田舎に帰ったぼくは、寒さによわくなった老人のように背を丸めて暮っていた。出発前に七十二キロあった体重は、六十キロを割るまでに減っていた。晩秋のまじり気のない寒気が、脂肪の失せた皮膚をとおして、容易に体の奥深いところまで侵入してきた。

朝、家を出るとき、顔をしかめ、肩に力を入れて強い陽射しに身がまえる——あの亜熱帯の国で形成された条件反射だけが執拗に残っている。玄関の古びたガラス戸を開けると、そこは高く濃い青空に押さえこまれた、よわい陽の支配する標高八百メートルの高原で、すでに盛りを過ぎた紅葉の山々がほどよい間を保って重なっている。肩すかしをくわされたように、両手をズボンのポケットにつっこみ、前かがみに歩き出す。

病院までは歩いて五分とかからない。幼稚園のスクールバスに乗り込む子供たちの甲高い声——彼らのよく手入れされた光沢の良い髪から、シャンプーの香りがただよってくる。送り出す母親たちの、肉付のよい頸から出る自信にあふれた中音の笑い声。道端で茶色い落葉を焚く着物姿の老人のおだやかすぎる笑顔。

むき出しの強い陽の下で、はだしの子供たちと、やせきって乳の出ない老婆のような若い母親たちと、枯れ木のように押し黙った、あばらの浮く老人たちを見慣れた目は、人口一万余の田舎町の、あたりまえの朝の風景になじもうとしない。ぼくはひたすら前かがみに路地を通り抜け、病院の自動ドアをくぐる。

ロッカーで白衣に着替え、八階の病棟に上がる。ガラス張りのナースセンターに入ると、すでに出勤してきている医者たちに、夜勤あけの看護婦たちが患者の状態を報告している。二台の電話がひっきりなしに鳴り、入院の予約、検査の依頼、処方の確認、など、看護婦たちはせきたてられるような口調で受話器に向っている。

電話のない国境地帯で過してきたぼくは、相手の顔も見ずに話さなければならないほど緊急で重要なことというのは、実はほんのわずかしかないのだ、と思うようになっていた。受話器を置いたばかりの若い看護婦にそのことを言うと、彼女は、
「重症の後遺症ね」

と、語尾をはね上げて、また鳴り出した電話を手早く取った。

ぼくは奥のビニール張りのソファに座った。

「元氣そうでよかったねえ。そんなにやせちまったから、心配してたよ」

湯気のたつやかんを提げた掃除婦のおばさんが言った。

ぼくはテーブルの上に出ているアルマイトの急須を差し出し、おばさんに湯をわけてもらって、出がらしの茶を飲んだ。熱い湯飲みを吹きながら目を上げると、いつも看護婦たちが髪をなおすために使っている壁の丸い鏡に、頬のこけた自分の顔が映った。陽に焼けすぎた肌が異様に黒い。口唇と地肌の区別がつきにくい。皮下まで煤けてしまったような色で、陽焼けと言うより、むしろ悪液質の患者の皮膚色に近い。

「熱、まだあるんだろう。休んでいいぞ」

看護婦の報告を聞き終えた先輩の今井が、カルテを手にしたままふり向いて言った。

今井はアメリカ東部の大学に三年間留学していたとき以来身につけてしまったという、分刻みのスケジュールで仕事をする。胸に赤いイニシャルを入れた半袖のケースタイルの白衣を着て足早に歩き、自分の受け持つ患者が重態になっても不機嫌にならないから、若い看護婦たちの受けがいい。

「なにか仕事ありませんか」

ぼくはソファに座って湯飲みを持ったまま、上目遣いで聞いた。

「バンコクの下町の浮浪者みたいなこと言うなよ。なあ」

今井は自分のジョークの出来を確認するように、うしろに立つ研修医の方をふり返った。角刈り頭に度の強い眼鏡をかけた背の低い研修医は、タバコのヤニが付着しているらしい黄色い前歯を見せて、あいまいな笑顔を造った。

三ヶ月前まで、今井とぼくがペアを組んで受け持っていた十数名の患者たちは、今、すべて彼と研修医の担当になっている。仕事を覚えただで、死者を見送ることにさえ新鮮な感動を受けとめているらしい研修医と、彼にアメリカで身につけたオールラウンドな知識を教えこむのに忙しい今井との間に、ぼくの入り込む余地はなかった。論文をまとめるために、治療とは直接関係のない数多くの検査を患者に強いる今井と、五年間、一編の論文も書いていないぼくとのペアは、もともとあまりうまくはいっていなかったのだが。

七月の中旬、二人そろって回診の途中、突然、タイに行きたい、と言い出したぼくに、今井は軽く肩をすくめ、考えなおしたら、と哀れむように言った。

「難民のために、なんて柄じゃないのは自分でもよく分かっているだろうが。アメリカならまだしも、日本じゃなんの業績にもならないんだぞ。あんなくそ暑いところへ行っても」

薄い口唇でせせら笑う今井の言うことはほとんど正しかった。

業績のことはともかく、一年前まではいていたズボンがすべてはけなくなるまで腹が出て、アユの解禁日を待ちかね、その日から三日間の夏休みをとる予定にしているぼくは、どう考えても、献身的な難民医療のイメージからは最も離れた位置にいた。

カンボジア難民医療団に志願する医者が少なくなっているため、これまで一年近く派遣してきている日本医療チームの編成が困難になっている——医長がこの病院にも医師派遣の依頼が中央官庁から来ていることを、内科の定例会議で伝えた。そのとき、ぼくは細長い会議室のいつもの最後列に座り、ノートにこの付近の川の絵図を描き、となりに座る釣り好きの同僚と解禁日のねらい場を小声で検討し合っていた。例年、大型のアユが居つく、病院の裏の荒瀬の大石をボールペンで黒く塗りつぶしていたぼくは、下半分を塗り残したまま手を止めた。そこは今年はだめじゃねえか？——同僚が肘で脇腹をこづいた。ぼくはノートの余白に「カンボジア」と書いた。同僚はぼくの顔をのぞきこんできた。行ってみよう、と思った。なぜ？ というふうに、同僚は口を尖らせた。なぜ？——

あとになって思い返してみると、そのときの気分は、日本海に面した東北の町で過した学生時代に経験した覚えのある衝動によく似ていた。

夏の午後、階段教室の最後列で退屈な解剖学の講義を受けていたとき、となりに座る友人が窓の外の沈みかけた陽を指さし、

「抜け出して海に行かねえか？」

と、誘った。

大腿骨にラテン語を書き入れていく教授の板書を写すだけの作業より、夕陽に向かって泳ぎ出し、沖の波間にただよいながら、ひき返そうか、そのまま大陸に向かって進んで、疲れ果て

て沈んでしまおうか、と悩む方が、退屈しきっていたそのときのぼくにははるかに貴重に思えた。ぼくはためらわずに教室を抜け出し、友人の運転する中古の軽自動車で海に向った。

結局、ぼくは会議では手を挙げず、解禁日の対策を検討し続けた。アユを釣ってからでも遅くはないだろう、と思ったからだ。日本を離れることで心残りがあるとすれば、それはただ、解禁日が目前に迫っているアユのことだけだった。

医長のくり返しの呼びかけに、二十数名の内科の医者たちの中でわずかなざわめきが起ったが、志願の手を挙げる者はなかった。医長はあっさりと次の議題に話を移していった。

解禁の日は朝からよく晴れていた。七時に打ち上げられた開始の花火の音を、ぼくは寢床の中で聞いた。九時に起き、十時を過ぎてようやく川に向った。生後三ヶ月の次男を抱いた妻と、三歳の長男も車に乗った。

八ヶ岳と浅間山を結ぶ直線を通る川の兩岸には、五メートルほどの間隔でぎっしり釣り人が並んでいた。ぼくはかねて下見をしておいた上流の橋の下に向った。予想通り、流れの速いこの付近にはめずらしい、底が岩盤になっている深い淵の兩岸だけは釣り人の姿がなかった。橋の下の急な瀬が流れを休めるその淵は、三メートル近い深さなので、オトリを用いる釣りには適さないのである。

ぼくは岸の岩場に立って八メートルの長竿を出し、濃い緑色によどんでいる淵に毛針を沈

めた。竿をゆるやかに上下させていると、急に竿先がブルツと震え、一気に抜き上げると、夏の陽を受けてうすい緑色に輝く型の良いアユが釣れていた。やはり毛針でも釣れるのだ！ぼくは胸の裏からこみ上げてくる笑いを抑えられなかった。

アユ釣りといえば、オトリにひかせた針に野アユを引っかける友釣りが常識になっているこの土地で、ぼくは今年からあえて毛針釣りに挑戦した。そんなことしかぼくには挑むものがなかったからだ。この一年間、釣りに関する多くの本を読み、雑魚を釣りつつ川を見て、この淵なら、とねらっていたのだ。このことは、釣り好きの同僚にも内緒で通してきた。

アユは釣れ続けた。入れ食いであった。自分で針をはずす時間さえ惜しく思えてきたので、岩場の上にいる妻を呼び、抱いていた次男を背負わせて針をはずさせた。

午後になっても、おなじ場所でも、おなじ間隔で釣れてきた。

陽が八ヶ岳連峰の端の、一段高い赤岳に沈みかけた頃、友釣りをやめた釣り人たちがぼくの周りに寄ってきた。ぼくが釣り上げるたびに、ほおっ、という吐息が彼らの口からもれた。友釣りは不調だったらしい。いつの間にか、彼らのうちの数人が、妻に代わって針をはずしてくれていた。

「こうなりゃあ、かあちゃんに夕めし作ってきてもらっても釣り続けるだなあ。こんなことあめったにねえもんだ」

土手で草を刈っていたじいさんが下りてきて、初めて見らあ、こんな大釣りは、と、あた

りにふれるような大声で言い、ぼくの汗のにじんだTシャツの背をたたいた。

浅瀬での水遊びに飽きた長男が、家に帰りたい、と泣き出した。妻は夕食の時間を気にした。ぼくはすべてを無視し、憑かれたように釣り続けた。

高く釣り上げたアユの向うに、妙に赤っぽい月が出た。中空に竿を止めて、ぼくは月を見た。丸い光の中央で、流線型の黒い魚影が大きくはねた。竿が急に軽くなり、体中の力が抜けた。ぼくはそのまま岩場にへたり込んでしまった。

タバコを吸おうとしたが、竿を握りっぱなしだった指は熊手のようになっただま開かず、ライターを着火させることすらできなかった。見かねた妻が火をつけてくれたが、細いライターの火に照らされた彼女の手は、びっしりこびりついたアユのウロコで銀色に光っていた。家に帰り、缶に入っていたアユをステンレスの流しにあげて数えてみると、百三十一匹いた。大きな方から十匹ずつ選んで、竹細工の皿にのせ、妻に近所へ配らせた。

風呂を出ると、妻が作ったアユの塩焼とカラ揚げを縁側に持ち出して食いながら、冷えたビールを飲んだ。川の方から涼しい風が吹いて、軒下の南部鉄の風鈴を鳴らしていた。

次男を寝かしつけた妻は、長男を連れて庭に出て、線香花火を始めた。ぼくは縁側に横になって、半分目を閉じながらそれを見ていた。

「お父さんも、ほらあ」

長男が最後の一本になった線香花火をぼくに握らせた。

妻がマッチで火をつけた。ぼくは腹ばいになって縁側から身を乗り出し、火花を見た。鋭い火花が散るたびに、長男は手をたたいた。やがて火花は消え、くすぶった赤い玉が残った。竿を握っていた手にはまだ細かな震えが残っており、赤い玉はすぐに乾いた土の上に落ちた。古い板塀に囲まれた小さな庭が、急に思いがけない暗さになった。闇の中から、長男のおとりしたあくびが聞こえてきた。

「タイに行く。難民医療団に入る」

ぼくは腹ばいになったまま妻に言った。

彼女は膝をかかえてうずくまったまま、いつまでも顔を上げなかった。

その夜、医長に電話した。

医長は、

「出発は十日後だぞ」

と、言った。

2

たいへんな所に行って来たのだから、ゆっくり休めばいい——病院の中で出会う誰もが、陽に焼けすぎたぼくの顔をあきれたような目で見たあと、おなじ言葉を口にした。